

地域づくりの系譜

—山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市—

湯澤 規子

- I. はじめに
- II. 戦前・戦後農村の再編
 - 菱山集落の甚六会と甚六桜—
 - (1) 菱山集落の百年史
 - 青年たちと敬老会—
 - (2) 4Hクラブと甚六会
 - (3) 桜の植樹事業と地域間交流
 - (4) 自治公民館活動と地域の担い手育成
 - (5) 甚六会その後の展開
 - (6) 新たな担い手の登場と地域づくりの広域化
- III. 暮らしの拠り所としての「地域」再発見のネットワーク—かつぬま朝市—
 - (1) 住民とかつぬま朝市
 - (2) 「地域」の再発見
 - (3) 勝沼の地域づくりネットワーク
- IV. おわりに—地域づくりの系譜—
 - (1) 勝沼における地域づくりの系譜
 - (2) 創意と創造が生まれる素地

I. はじめに

山梨県甲州市勝沼は、ぶとうとワインの産地として知られている¹⁾。これを生産の側面からみた特徴とすれば、本稿ではもうひとつの側面、すなわち、人びとの生活からみた勝沼の特徴を合わせて考えてみたい。注目するのは「甚六桜」と「かつぬま朝市」である。いずれも現在、勝沼の魅力を構成する重要な

要素となっている。一見、それぞれ個別の「地域資源」のようでありながら、実は両者は「資源」と名付けられるよりも先に、勝沼に暮らす人びと自身の「拠り所」であったという点で共通している。

私たちはとすると、第三者の目で「地域資源」を発掘し、それによって観光業を盛り立て、外部からの集客がいわゆる「地域経済の活性化」をもたらすと考えがちである。しかしながら、地域資源や地域経済という概念には、それとは別の意味も含まれているのではないだろうか。つまり、住民自らが地域に暮らす意味を肯定的に受け入れるための根拠もまた、地域資源の重要な側面なのである。これは「暮らしの拠り所」²⁾と言い換えることができよう。地域に内在するこの拠り所を様々な工夫によって築きあげていくことを本稿では「地域づくり」と定義することにしたい。

地理学において、「地域づくり」に関する議論は1980年代のコミュニティ施策や、近年の「地方創生」施策との関わりを背景として、かなりの蓄積がある³⁾。「地域づくり」という概念を比較的早くから提示してきた宮口(2000)によれば、地域づくりとは「今の時代にふさわしい新しい価値を地域からつくり出し、地域に上乘せすること」⁴⁾であると定義されている。本稿ではここに、「何のために」、「誰のために」新しい価値をつくり出

キーワード：地域づくり、系譜、山梨県甲州市、勝沼、暮らしの拠り所

すのか、という視点を加えて議論することにしたい。

地域づくりに関するこれまでの研究では特に、様々な実践の事例研究、あるいは地域比較研究が多く蓄積されてきた。その一方で、時間軸をふまえた歴史的研究はそれほど多くはないように思われる。そのため、「地域づくり」は話題にのぼるたびに比較的新しい課題のように考えられがちであるが、ひるがえってみると、そもそも暮らしの場をいかに築きあげるのかという問題提起は、近年に始まったことではない。地域資源、地方創生という概念の登場を待つまでもなく、住民自身が「暮らしの拠り所」、言い換えれば、「居場所としての地域」を築き取り組みは、これまでも営々と続けられてきたのである。

こうしてみると、現在問われている地域の課題は、長い歴史の中で、常に試行錯誤が繰り返されてきた、かなり普遍的な問題であるということができる。とするならば、ここに、目の前の事象を個別にみるだけでなく、それらにつながる過去の営為を一連の歴史的つながりとして理解する必要性が見出される。本稿ではそれを、「地域づくりの系譜」として明らかにすることにしたい。

暮らしの拠り所の歴史の変遷については、社会学の立場から高橋⁵⁾が「共同」のあり方に着目することで、その戦後史をまとめている。同書によれば、「共同」は人間が生きていくうえで欠かせないものであったが、「私生活(主義)」の広がりとともに、「むら」や「町内会」に内部化されていた「共同」の体系が、1960年以降、日本では「外部化」の道をたどってきた。近年、「共同」を再び地域に「内部化」しようとする動きは、私生活主義の代償として失ったものを見直しにはかならない。

その大筋に異論はないが、例えば政策的にみるとそうであったとしても、実は「暮らしの拠り所」という視点からみると、そう簡単

に外部化ばかりが進んだとは言えないのではないだろうか。そのような事例もあるとするならば、政策と地域の実態との齟齬や、政策に対抗するかたちで展開した住民主体の動きもあったはずである。そのことを、勝沼の約150年間の変化に注目して、もう一度考えてみたい。

具体的には山梨県甲州市を事例として、甚六桜を中心とした甚六会と菱山集落の実践と(Ⅱ)、より広域な地域連携を伴う「かつぬま朝市」の実践を明らかにし(Ⅲ)、それらをこの地域の歴史の中に位置づけることを目的とする。そのうえで、明治期の合併と村々の対応、明治初年に日本で初めて葡萄酒醸造会社を設立した有志たちの実践を視野に入れて、勝沼の地域づくりを、約150年間にわたるひと続きの「系譜」として示したい(Ⅳ)。

Ⅱ. 戦前・戦後農村の再編

―菱山集落の甚六会と甚六桜―

(1) 菱山集落の百年史―青年たちと敬老会―

「甚六桜」の植樹運動の舞台となる菱山集落(現山梨県甲州市勝沼町菱山)は、斜面に広がる扇状地を多く擁し、農業環境は過酷ながらも、その土地条件を利用してぶどう栽培が盛んになった地域である(図1)。正徳検地には畑方88%、田方12%という耕地比率が記されているように⁶⁾、以前は米麦栽培と養蚕が盛んな地域であった。農林業センサスと世界農林業センサスによれば、樹園地の割合が高まったのは第2次世界大戦後であり、2010年では耕地面積の99%が樹園地となるに至った(表1)。いうまでもなく、樹園地のほとんどは果樹栽培地であり、その88%を占める果樹はぶどうである。

この集落の特筆すべき活動に、明治37(1904)年から青年たちによって始められた「敬老会」の開催があげられる。以下ではまず、甚六桜の植樹運動へと連なる戦前期の村の青年たちの活動として、この「敬老会」に



図1 研究対象地域

資料：国土地理院発行5万分の1地形図（甲府1997，御岳昇仙峡1991，丹波2000，都留1996発行）

表1 菱山の農業推移

項目		1965年	1985年	2005年			
農家数 (戸・%)	専業	111	41	96	38	63	34
	第1種兼業	103	38	78	31	56	31
	第2種兼業	55	20	76	30	64	35
	計	269	100	250	100	183	100
耕地 (ha・%)	田	15	10	0	0	-	-
	畑	18	12	14	9	2	1
	樹園地	117	78	150	91	134	99
	計	150	100	164	100	136	100

注1) 2005年は販売農家と自給的農家の区別があるため、販売農家の数値を掲載した。

2) 「-」は調査は行ったが事実のないもの。

資料：『農林業センサス』、『世界農林業センサス』各年

着目したい。敬老会を始めて100年がたった平成16(2004)年、100回目の開催を記念して、第百回菱山地区敬老会実行員会により『菱山百年』が刊行された。「敬老会百年、それは菱山百年の歴史そのものです」⁷⁾と書かれた同書には、菱山集落の古老たちの座談会

が収録されており、100年の歴史を知ることができる。

菱山はもともとトウモロコシ、甘藷、米麦、養蚕が主な産物で生活が単純であったため、その分、村の祭りである道祖神祭りは盛大であった。しかし、青年学校で学んだ青年たちは、郷土の発展のためには、個々の村祭りを廃止し、各部落を総括した行事にすることが重要だと考えるようになり、道祖神祭りの代わりに明治37(1904)年から「敬老会」が開催されるようになった。お年寄りを招いて料理を出し、各部落で趣向を凝らした演芸を披露するというのがその内容である。

敬老会の60周年記念特集『菱の実』には、敬老会の費用を捻出するために、青年たちが奔走する姿が記されている。青年団は新聞配達や山仕事に従事し、その事業収益で敬老会を催していた。新聞配達は菱山を北と南の2つに分け、朝3時前には家を出て、駅で新聞を折って配達した。これは第2次世界大戦後

も続いた。

大正末期ごろになると、部落ごとの演芸も多様化して、演劇も取り入れられ、台本づくりから舞台づくりまで青年たちが自分たちで手掛けるようになった。合羽に三度笠のヤクザ踊り、切るか切られるかといった喜劇から、「父帰る」という名作劇場、人情芝居まで、内容も豊富になった。青年たちは敬老会開催の1か月前から毎晩のように練習をした。練習場所は支部長の家や、お蔵、養蚕小屋などであり、中には「同志会」と呼ばれる小屋もあった。そこに甘藷を切って茹でて干した「キッポシ」を持ち寄っては、夜明けまで練習することもあったという。これは青年団が百数十人いた頃の話である。

明治から昭和にかけては、明治8年の大瀧山の国有林の村への払い下げ、明治40年の大水害、大正2年の勝沼駅開設など、菱山の人びとは激動の社会情勢を経験した。特に勝沼駅の開設は新時代の幕開けとして大きな意味をもっていた。大正8年には、菱山報徳製糸株式会社が設立され、菱山の多くの人びとも株主となった。この頃に敬老会がますます盛大になったのは、このような時代の反映でもあったのである。

しかし、同社は昭和恐慌期に倒産し、かつこの恐慌は、養蚕が盛んな菱山にも多大な影響を与えた。さらにその後は戦時体制下に置かれることになり、毎日のように出征兵士を送り出すころには敬老会も形ばかりのものになっていかざるを得なかった。また、修養機関として発足したはずの青年団が半官的組織に変わり、軍事教練を主とする運営が行われるようになったのは、当時の全国的な趨勢でもあった⁸⁾。

第2次世界大戦が終わると、菱山では村有林を財源として単独で菱山中学校を開校した。農業も再開したが、昭和26(1951)年6月12日の雹害によって、葡萄(13町歩)と麦(48町歩)は全滅した。これが契機となって、

菱山にはデラウエア葡萄が導入され、デラウエアの一大産地へと急転換していった。

全国で昭和の町村合併が始まり、菱山でも昭和29(1954)年に村有林を財産区として、勝沼町に合併した。この時、各町村の青年団は1年遅れで勝沼町青年団として再編された。しかし、それは5年間で解団して旧町村単位の青年団に戻り、複数の青年団が連絡協議会として連携することになった⁹⁾。「もはや戦後ではない」と言われた昭和31(1956)年、菱山は新農村建設計画の国指定を受け、農協の肥料配給所、共同防除施設、客土など、新しい農業に向けた事業を進め始めた。こうした社会の変化の中で、菱山の人びとが1年に1度、総出で仕事をする唯一の機会が財産区の手入れとなった。

昭和43(1968)年には第64回を最後に青年団が解散し、敬老会の開催は区長会が引き継ぐという変化も見られた。その後、敬老会は、時には婦人会と共同で、あるいは区長会、公民館、民生児童委員などの組織が協力し合って続けられ、今日に至っている¹⁰⁾。

(2) 4Hクラブと甚六会

昭和35(1960)年頃に菱山の青年団が再結成されるよりも早く、昭和24(1969)年には戦後の葡萄栽培の中心的担い手となる農家の長男たちが集まり、新たに菱山4Hクラブが設立された¹¹⁾。4Hクラブとは、頭脳(head)、健康(health)、手(hand)、心(heart)の4つを備えた会のことで、この時期、実践を通して自らを磨くとともに、互いに力を合わせて、よりよい農村を建設することを目指して全国各地で設立された戦後の新しい青年組織である¹²⁾。菱山4Hクラブではぶどう栽培のための気象観測や、果樹栽培講習会、土壌検定などにまず取り組み、昭和34年には優良クラブとして農林大臣の表彰を受けている¹³⁾。

一方、再結成された青年団は「うまい物食べる会」などを、8区持ち回りで始めたが、

ほどなくして形骸化し、青年団の継続は難しくなった。そこで、青年団を解散し、内田金光氏らが中心となり昭和48(1973)年に16人の長男たちが集まって無尽形式で新たに「甚六会」が設立された¹⁴⁾。そして、この甚六会がまず目指したものが、勝沼駅舎の改築だったのである。

そのために青年たちは、駅周辺の土地の払下げと、農協と連携した集荷場設立の要請に向けて、勉強会を始めた。陳情書を作成するために、当時県の職員であった篠原敏彦氏が請われて甚六会に加わったのはこの時期である。こうして町長に提出した陳情書は以下の通りである(史料1)。

【史料1】

陳情書¹⁵⁾

要旨：勝沼駅周辺の国鉄不要地の払下げを早急に受け、駅周辺を整備願いたい。

理由：葡萄の町、観光の町をキャッチフレーズとしているわが勝沼町の玄関口である勝沼駅は、現在国鉄の合理化計画により昭和45年10月1日から営業委託方式となり、従来の駅としての機能は全くなり(中略)。

従って従来から駅を利用している地元住民、観光客にとっては、大きな打撃を受けており手荷物、小荷物業務の廃止、通過電車の増加、観光案内の不足等非常に不便、不都合を感じているのが実情であります。又駅周辺の美化、駅前広場の整備、不用地の有効利用、不用建物の撤去整備等、国鉄所有地であるため、地域の意のままにならず、旧ホームの広大な面積、旧保線区の作業用詰所等すべて荒れほうだい雑草は茂るにまかせて、手を拱いている現状は観光を唱える勝沼町の玄関として実に見るに忍びないものであります。(後略)

昭和48年12月15日

菱山区長会会長 山下国之
菱山農業協同組合組合長 三森 保
勝沼町長 佐藤嘉明 殿

史料1からは、なぜ、駅周辺の土地の払下げが切望されたのか、その状況をうかがい知ることができる。勝沼がいよいよ観光地へと発展していこうとする時に国鉄の合理化によってその玄関口となる勝沼駅が荒れ放題となったが、国有地であるため、住民自身がそれを改善することさえ叶わなかったのである。この状況に対して、署名も集めてのぞんだ陳情であったが、すぐには受け入れられなかっただけでなく、県営住宅を建設するという案が浮上することになった。菱山の人びとはそれに反対し、議員と直談判を続けた。さらに、駅周辺の美化活動の具体的な目標として、桜を植えるという名目で下刈を始めた。今のように下刈機が無かった当時、こぼし竹が鬱蒼と繁る6万坪の土地を手作業で刈ったため、手は豆だらけになった。それでも甚六会を中心として、下刈作業は続けられた。こうした活動の結果、最終的には菱山の人びとの陳情が認められ、本格的に桜の植樹が始められることになったのである。

(3) 桜の植樹事業と地域間交流

「ここで生まれて、育って、死んでいくんだからさ」。篠原氏は、桜の植樹を始めた動機をこう説明する。

今日、JR中央線「勝沼ぶどう郷駅」に降り立つと、まず線路沿いの桜並木が目に入る(図2)。この桜は上記の経緯を経て、昭和49(1974)年に菱山集落の住民によって植えられたもので、植樹の中心となった「甚六会」にちなんで「甚六桜」と名付けられた。現在ではJR東日本、甲州市、山梨県も重要な観光資源と認識しているこの桜並木は、実は菱山の青年たちが自分たちの生きる場を築いていく実践として生まれたものであった。それ



図2 勝沼ぶどう郷駅ホームからみた甚六桜
資料：2015年4月5日筆者撮影

は、戦前期の青年たちの敬老会への熱意とも通じるところがある。

昭和52(1977)年頃、県職員の給料が1ヶ月4万円であったのに対し、下刈機は1台2万円もした。新品はとても買えなかったため、甚六会のメンバーは中古農機具を扱う都留の秋山村にある雑貨屋まで足を運び、下刈機を1台ずつ購入していった。桜の苗は、山梨県に宝くじ事業から送られてきた苗を入手することができ、それを植えた。昭和49(1974)年当時、まず、勝沼駅周辺に桜50本を植栽した。石だらけの線路沿いの土手を手で耕し、土はモッコを使って2人で運んだ。これは本当に大変な作業であったと、内田氏や篠原氏は振り返る。しかし、「できることは地域でやろう」と考えていた甚六会メンバーは、同じ苦勞をするなら「桜を植えて育て、俺たちが年寄りになったとき、孫と一緒に花見をするところをつくるんだ」¹⁶⁾と話合っってこの作業を続けた。そして、1979年までには2,000本の桜の植栽が完了したのである。

この運動への賛同者も増え、昭和52(1977)年には甚六会以外の協力者も加わって「桜を守る会」が発足した。昭和55(1980)年には念願の駅舎と農産物直売所が完成し、国鉄用

地の払い下げ地は農協共選所となった。

1本目の桜を植えてからちょうど10年がたった昭和60(1985)年には地域づくりの課題を話し合うことを目的として「さくら祭り」が開催された¹⁷⁾。主催は甚六会である。この頃、県でも「一村一品運動」を展開していた大分県の人びとなど、地域づくりに関わる人を県外から招き、議論を始めた。そして甚六会でもポール・ラッシュの会、赤沢青年同志会、土の会、一色ほたるの里保存会、山梨国蝶オオムラサキを守る会など、県内の地域づくりグループとの交流を始めた。こうした交流は、住民自身が「地域づくり」について主体的に考える場へと発展していった¹⁸⁾。

(4) 自治公民館活動と地域の担い手育成

桜を植え始めた頃、甚六会はもう1つの課題に取り組もうとしていた。それは地域の担い手の育成である。甚六会は、昭和51(1976)年から子供のための柔道、書道、珠算教室を始めた。教えるのは甚六会の会員や菱山の人びとである。最初は小学校の講堂の2階を道場として、古畳50畳を保護者で持ち込んで菱山の柔道場の活動が始まった。団員を募集すると、60名もの希望者があったため、保護者会を立ち上げ、畳の上げ下げ、掃除などは保護者が協力した¹⁹⁾。

その後、次第に自前の道場の建設が切望されるようになった²⁰⁾。ちょうどその頃、高校からプレハブ校舎を譲り受けられることになり、保護者会と指導者が中心となって、設計、整地、基礎の穴掘り、コンクリート作業、廃材の運搬などをすべて手作業で始めた。冬のからっ風の中で泥まみれになって作業している菱山の人びとを見て、甲信建設の社長や内田造園の社長もブルドーザーを持って協力に加わり、昭和53(1978)年にはプレハブの道場が完成した(図3)。当時の収支決算報告を示すと、次の通りである²¹⁾。総支出額730万円の内、県と町からの補助金が150



図3 菱山の道場

資料：2013年8月31日筆者撮影

万円（約21%）、寄付が580万円であった。寄付の内訳は、菱山財産区からの補助金が200万円、神社からの寄付が100万円、農協からの寄付が50万円、菱山柔道スポーツ少年団から30万円、敷地造成費としての200万円は甲信建設の寄付行為であった。

(5) 甚六会その後の展開

こうした甚六会の取り組みは、次第に菱山の人びとの拠り所として欠かせないものになっていった。甚六桜は菱山のものであるという意識が定着すると、菱山の人びとは「他人事」としてではなく、「自分事」として桜を眺めるようになり、「虫が付いている」、「雑草をぬかなければ」と声を掛け合うようにもなった。

甚六会への入会希望者も年々増えた。しかし、会が大きくなったことにより意思疎通が難しくなるという問題も生じてきたため、甚六会では昭和56（1981）年に「40歳定年制」を導入することに決めた。甚六会20周年記念誌掲載された回顧録によれば²²⁾、「1つの会が会長を置いて運営できるのは50人が限度だと思ったんです。今後、もっと会員が増えてくると意見の集約はさらに難しくなるし、若い会員が意見を言えなくなってしまう

う。（中略）地域に残る若い人たちにも、この会に入って活動してもらうことが、きっと将来の地域づくりやその会員のプラスになってくると思ったのです」、「人は変わっても甚六会という“名前”を残すか、死ぬまで同じメンバーでやっていく“人”を残すかで大議論をしましたね。若い会員のすなおな気持ちを聞きたかったことや、全体では集約が難しいこともあって各区に分かれて話し合い、それを定例会で発表する。たしか1年間続けましたね。結果は多くの経験をみんながする方がいい、と会員は40歳になったら退会することになったのです」。

こうして退会した草創期のメンバーたちは、甚六会のOB組織として「一葉会」を結成し、さらにそれに続くメンバーたちも「菱葡萄会」を結成した。その結果、甚六会を中心として、様々なグループが複層的に地域づくりへと関わるようになっていった。

(6) 新たな担い手の登場と地域づくりの広域化

甚六会が結成されて30年が過ぎると、そのメンバーも農家の担い手だけではなく増えてきた。当時の第6代会長であった内田秀俊氏は30周年に寄せて次のように述べている。

「甚六会の会員も既に2世代目に入ってきました。父達が描いた夢を引き継ぎ、再び自分たちの子へ。会員構成も結成当時の農業中心のメンバーからいわば異業種交流的な構成に変わってきました。今日多様化の時代と言われて久しいですが、甚六会もその例に漏れず当然のことながら多様なものの見方考え方を持つ人の集団になりました」²³⁾。

内田氏自身も一度菱山を離れて働いた経験を持つ、いわば新たな担い手の1人であった。内田氏は甚六会の活動以外にも、史料2のようなプロジェクトを構想していた。その冒頭の言葉を読むと、当時の菱山やその担い手たちが置かれていた社会情勢を読み取ることができる。

【史料2】

「菱山元気プロジェクト」²⁴⁾

「農業は将来性がないから自分の好きなことをやれ」そう言われて一旦は農業から解放されて育った世代が、知らぬ間に農業後継者として期待されるときがきた。ぶどうに育てられた世代が、ぶどうを守るか捨てるかの選択を迫られている。(中略)

実はちょっと不便、ちょっと足りないくらいが人間は想像力を発揮する。(中略)子どもたちに、菱山の暮らしの楽しさを見せつけてやれ！(中略)大人が生き生きワクワクしていることが最高の教育じゃないかなあ。菱山の大人たちよ、本気で夢を語り合おう！」

また、内田氏はぶどう農家の日々や直面している課題を農家以外の人びとも共有するために、『夢農民新聞』²⁵⁾という地域密着型情報紙を隔月で発行した。内田氏が構想したこのような一連の活動は、地域づくりがもはや菱山集落内にとどまらないものになりつつあった表れであったといってもよいだろう。

農家だけではなく、異業種の集まりへと変化した甚六会もまた変わりつつあった。サラリーマンが増えると、甚六会の中心的活動は、地域づくりというよりも桜を守ることに集約されるようになり、ついに2012年に同会は解散することになったのである。

Ⅲ. 暮らしの拠り所としての「地域」再発見のネットワーク—かつぬま朝市—

(1) 住民とかつぬま朝市

菱山集落だけでみると、青年たちによる敬老会、戦後の甚六会という地域づくりの系譜は、甚六会の解散によって途切れたように見える。しかし、本章でみていくように、勝沼全体あるいは甲州市全体へと視野を広げると、甚六会の活動を支えた精神やネットワー

クは次なる展開へと繋がっており、地域づくりの系譜は決して途絶えてはいなかった。

内田氏が『夢農民新聞』でいち早く取り上げた活動に、勝沼の住民が自主的に始めた「かつぬま朝市」がある。「勝沼ネット」という活動も始めていた内田氏は、勝沼内の様々な活動を見渡し、それをネットワークとして繋いでいくことを構想していた。実際、内田氏とかつぬま朝市の会長である高安一氏には交流があり、人的ネットワークとしても、意識の共有という意味でも両者は繋がっている。本章では、このかつぬま朝市に着目することを通して21世紀に始まった新たな地域づくりの特徴とその意味を考えてみたい。

勝沼町は平成17(2005)年に塩山市と大和村と合併し、甲州市となった。それに先立つ平成14年に、小澤正光氏と高安氏ほか2名が「まちづくりクラブ」を立ち上げ、平成の合併についての勉強会を始めた²⁶⁾。かつぬま朝市は、その実践の1つとして平成15(2003)年に高安氏が中心となって、四季の里公園にて始められた²⁷⁾。仕事のために東京から勝沼へ転入してきた高安氏は、東京にばかり目が向いていた時期もあったが、家族ができたことを転機として、「腰を据えてここに暮らすと決め、居場所をつくらうと一人の住民として(朝市を)始めた」という。まさに、住民自身の「暮らしの拠り所」、「居場所」をつくるのが朝市開催の最初の動機であった。高安氏の他にも3人の賛同者が集まり、「まちづくりクラブ」という名前で活動が始まった。

当初は思うようにいかず、ずらりと並ぶと思っていたぶどうやももは、既に流通ルートが確立されていた産地であったがゆえに出荷されなかった。しかし、とにかく毎月休まず続けていくうちに、少しずつ変化が見え始めた。「何かのために」、というのではなく「自分たちが良いと思っていることを発信する」、「出店者自身が楽しかったと思える3時間の場をつくる」と運営側の姿勢が変化した

ことも、人が集まり始めるきっかけとなった。ぶどうとワインにこだわらない、様々なカテゴリーの出店を受け入れるというスタイルも、この頃確立した。一般的に、このような活動が始まると、まず組織の規約が作られることが多い。しかし、かつぬま朝市には規約がない。それは、「あれをやろう」、「これをやろう」という出店者の創造性を最大限に生かすためにあえて規制を設けないという考えに基づいている。これまでの過程で、当日申込み、遅刻、早退も受け入れ、できるだけ参加の敷居を低くする、出店の種類も問わないなど、いくつもの境界を取り外しながら運営方針を確立してきた。そして、2015年現在、来場者は4,000人以上、出店数は200店以上という、賑やかな朝市が毎月開催されている(図4)。

規模が拡大し始めた平成17(2005)年には、会場を(株)シャトレゼ勝沼ワイナリー敷地内に移転し、平成24年11月に100回目の朝市が開催された。さらに、市外や県外からの来場者が増加すると、出店者の中から「かつぬま朝市サポーターズ」という組織が誕生し、送迎サービスなども始まった。これらはすべて、ボランティアで運営されている。また、県外からの来場者が近年ますます増加し



図4 かつぬま朝市の様子

資料：2015年4月5日筆者撮影

たため、平成26年には勝沼ぶどう郷駅から有料のシャトル便の運行が始まった。

店舗のカテゴリーに制約がないことは述べたが、具体的に言えば、市立図書館の司書たちによる子供たちへの読み聞かせブースの設置、音楽の演奏、ワインセミナーの開催などがあり、平成27年4月には結婚式も執り行われた。高安氏によれば、かつぬま朝市は、いわゆる「観光」のためでもなく、近年注目されている「コミュニティ・ビジネス」でもなく、行政主導の「地域づくり」でもない形を模索している。そうすることによって朝市は、多世代の人びとが、いろいろな境界線を外して、疎外されることのない自分たちの居場所を見いだせる「場」としての意味を持つようになる。わずか3時間の朝市が、毎月必ずそのような「場」として出現することの意味の大きさは、現在のこの朝市の賑わいや、この朝市での出店がきっかけとなって、勝沼で常設店舗を持って定住する人びとが増加していることなどが証明している。

そして、かつぬま朝市という場がとりもつ人びとの関係は、平成27(2015)年現在、勝沼という範囲を超えて、塩山など周辺地域も含む、より広域なものとなっている。甚六桜が昭和の合併に対する菱山的意思表示、主体的な対応であったとするならば、かつぬま朝市は、ますます広域化が進む平成の合併下での新しい地域連帯のあり方を提示する実践であるということができる。

(2)「地域」の再発見

平成27(2015)年現在、勝沼にはかつぬま朝市だけでなく、住民たちによる様々な活動が展開している。以下、いくつか紹介しよう。

かつぬま朝市でワインセミナーを開催している篠原雪江氏は結婚して県職員を退職してから、菱山の特定郵便局で働いた。甚六桜の立ち上げに関わった夫の敏彦氏が退職を機にぶどう栽培を始めると、雪江氏もぶどう栽培

に従事した。ぶどう栽培とワイン醸造業が盛んであった自分の足もとの地域を知るために、彼女はさらにワインの勉強を始めた。そして、平成17(2005)にワインのシニアエキスパートの免許を取得し、かつぬま朝市でワインセミナーを始めたのである。すると、ワインについて教えてほしいという人が増え、平成22(2010)年からは、農閑期の間には地元の銀月食堂でワイン講座を始めることになった。このセミナーは、ぶどう栽培を知らない転入者にとっては勝沼の歴史を知るきっかけになり、そして地元の農家からの参加者にとってはもう一度地域の農業を見直す場となった。菱山に嫁いで来た時、地元の寄合に行くと、必ず葡萄酒が出た。瀬戸物の茶碗にラベルのない一升瓶から村の共同醸造でつくった葡萄酒が注がれ、漬物を肴にして飲んだ味や経験を伝えていきたいという思いから、篠原氏は集落の食堂でワインセミナーを開催し続けている。

小出順子氏は対外的な観光案内所ではなく、地域住民が地域を知るための民間観光案内所をつくらうと、平成24(2012)年3月に「Caféつぐら舎」を開店した。ここには地域の様々なイベントの情報が集まるだけでなく、つぐら舎でもイベントが開催される。また、「志民役場」と称して、イベントの開催、移住などに関する様々な相談の場にもなっている。

かつぬま朝市の立ち上げと現在の運営に関わる小澤正光氏は、「かつぬまフットパスの会」の会長でもある。同会は、先人たちの話に耳を傾け、人びとが皆々と受け継いできたものを知るために、地域の道を歩くという活動である。ぶどうとワインはもちろんであるが、何気ないごく普通の道や集落にも受け継ぐべき歴史や哲学が見いだせるというこの活動への賛同者は年々増加し、県外からも多くのリピーターが訪れるまでになった。平成27年現在、1回の参加者は少ない時で60名、多

い時で80名にのぼる。運営スタッフは27名程であるが、当日は歩くコースの要所で「待ち受けガイド」と呼ばれる住民ボランティアが協力している。

高安氏と小澤氏が中心となって始められた活動には、「明日への伝言シリーズ」もある。これはかつぬまフットパスの活動と連動して地域の古老たちヘインタビュー取材し、それをオーラルヒストリーとして地域のケーブルテレビで放送するというものである。

以上の活動は「勝沼文化研究所」という名称の緩やかな連携をもっている²⁸⁾。同研究所は平成19(2007)年9月に設立された。当初は甲州市への合併後であったことから「KOSHU かつぬま文化研究所」という名称で始まった。しかし、合併の中で、「勝沼」という地名を残すか否かの議論の末、平成24(2012)年には「勝沼文化研究所」と改称することになった²⁹⁾。「勝沼文化研究所だより」³⁰⁾には「勝沼の地域にある宝物に気付き、再発見し、磨きを掛け、未来に伝えることが、地域文化を創造する活動であり、こうした活動を通じて、より魅力ある地域に発展させる活動を続けてきました」とある。こうして勝沼という「地域」は地域の人びとによって、彼ら自身のために、再び発見され始めたのである。

(3) 勝沼の地域づくりネットワーク

このように、勝沼には様々な活動が網の目のように展開している。その1つひとつは個別ではなく、互いに関連し合い、派生して広がりながら展開してきた。

実はこれらの活動を始めたキーパーソンたちの多くは、平成21(2009)年に勝沼町が始めた、「勝沼ヒューマンプラン」の参加者という共通点がある。これは男女共同参画事業の一環であったが、参加者たちの言葉によれば、明確なプランが町から提示されたわけではなく、そこは参加者が自由にアイデアを出し合う場となっていた。既にかつぬま朝市

の活動を始めていた高安氏にとっては、参加者や講師との議論を通して、制約を設けずに思い切ってやってみようと思えたことが大きな成果であった。そして何よりも重要なのは、この参加者たちのネットワークが今日みる勝沼の様々な活動を結びつける役割を果たしているということである。これを図にする、図5のようになる。本稿では詳しく述べてはいないが、勝沼の主要産業であるぶどう栽培やワイン醸造業との関わりもある。

つまり、この勝沼町の呼びかけ自体が直接的な成果をもたらしたというよりは、そこから発想や励ましや自信を得た人びとが主体的に行動し始めたことが、その後の勝沼の「地域づくり」を支えることになったのである。

IV. おわりに―地域づくりの系譜―

(1) 勝沼における地域づくりの系譜

本稿ではまず、菱山集落を事例として、明治期の青年たちが尽力した「敬老会」、第2次世界大戦後の4Hクラブ、青年団とその後

に再編された「甚六会」の植樹活動を、菱山集落におけるひと続きの地域づくりの系譜として示した。次に、菱山集落を中心とした活動が内田秀俊氏によって勝沼全体へと広がった意味について、かつぬま朝市を事例に考察した。地域づくりのネットワークは菱山集落という枠組みを超えて、勝沼町における「かつぬま朝市」、勝沼文化研究所に関連する様々な活動へと繋がり、現在に至っている。

甚六会もかつぬま朝市も、合併をきっかけに、住民自身が暮らしの拠り所を再考しようとする取り組みであった。そこで本稿の最後に、この系譜をさらに遡り、明治期の合併に目を向けてみたい。事例とするのは明治8(1875)年に上岩崎、下岩崎と合併して祝村となった藤井集落である。菱山集落とは異なる事例であるが、勝沼地域の中では扇状地上に立地し、養蚕が盛んな集落であったという共通点がある。「祝村」が誕生する時、藤井村の村長は、合併に際しての心得として、村民に次のような言葉を伝えた(史料3)。

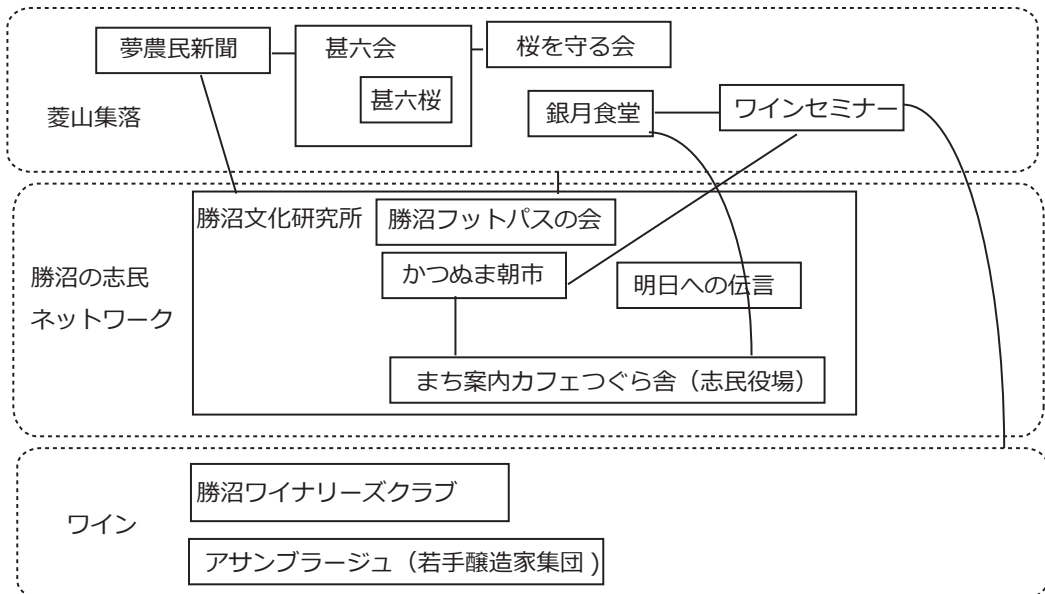


図5 勝沼の地域づくりネットワーク

資料：聞き取り調査により作成。

【史料3】

合村二付必要心得方³¹⁾

合村ト者乍申、下岩崎等者、全国一等豊饒之地ニ而、往古より村並能ク、多人数ニ而才能之者多分有之、上岩崎逆も、田方も多し、其上葡萄之益も若干有之、中々藤井等及所ニ非ラズ、当村之儀、往古より薄益之地ニ候間、其心得ヲ以、丹精ヲ能々尽し、農事ヲ励ミ、村柄ヲ引立置、少人数ナガラモ人材ヲ揚ゲ、人和ヲ備置、上下岩崎組ニ何事も不養様、幾重ニも平生心掛ケ置可申事
明治八年十二月 石原四郎 印

藤井村は3村の中で最も規模が小さく、生産性も低かったため、村長は村民に、丹精を尽くし、農事に励むことで村柄を引き立て、小人数ではあっても皆で協力していこう、と呼びかけている。これもまた、明治の合併に直面した人びとが自分たちの暮らしの拠り所をいかにしていくべきかを再考し、再認識した証左であるといえるのではないだろうか。

このように、歴史的に見れば、近世以来の村々が直面した明治の合併、その後の昭和の合併、そして平成の大合併という制度的変化のたびに、人びとは暮らしの拠り所をどこに求めるべきかを常に模索してきたことがわかる。その背景には、合併が進むほど、暮らしの拠り所と制度的地域区分の齟齬が大きくなるらざるを得なかった現状があった。加えて、第2次世界大戦後、とりわけ高度経済成長期に生じた産業構造の転換によって、農山漁村から都市への人口流出が進んだことも、地域のありようを考える契機となったことは言うまでもない。

こうして考えると、少なくとも勝沼では、時代ごとの地域づくりの足跡を個別にではなく、ひと続きの系譜としてみるができる。その実践をつなぐ共通点は、住民自らが自分たちの居場所を「ここに生きてよかった」と実感し、誇れるものにしていくことを

目指しているということであった。これは外部から訪れる観光客のためでも、観光業から得られる利潤のためでもなく、あくまでも地域の暮らしを満足できるものにするのが重要な意味をもっていた。

(2) 創意と創造が生まれる素地

これまでの行政主導の地域づくりは国土開発の一環として議論されてきた向きがあり、「地域開発 (regional development, rural development)」という概念が用いられてきたように思われる。しかし、本稿で見てきたような住民の主体性や自律性に基づく活動には、開発というよりもむしろ、自主的な創意工夫に重きを置いた様々な活動の連携という意味が多分に含まれており、むしろ「地域の創造性 (creativity of local associations)」と表現したほうがより適切であるように思われる。

このような議論は近年、イタリアのポローニャを主たる事例として佐々木³²⁾や井上³³⁾によって「創造都市」の可能性が示され、どこにでもあるような普遍価値ではなく、その地域にしかない固有価値³⁴⁾が注目されるようになったことと無関係ではない。創造都市に関する議論はその後、「創造農村」という議論へも展開した。これに対して地理学では杉山³⁵⁾が、中山間地域の実態に即した議論とするためには概念の精緻化が必須であると、特に創造するという行為の目的が、新自由主義的な流れを目指すものではなく、地域のモラルに基づくことが重要だと述べている³⁶⁾。

しかし、これらの議論では、創造するという行為の素地にあるモラルの内実、あるいは活動する人びとの目的や動機、それらが生まれる素地については必ずしも明らかにされてはいないように思われる。これに対して、本稿では、勝沼で展開してきた様々な活動の検討を通して明らかになったこととして、次の

ような2つの見解を示したい。

1つ目は本稿でみた「地域づくり」の目的は、第1に住民自身の拠り所となる居場所づくりであるということである。高安氏自身、小さな活動の集まりが現在の勝沼を全体として魅力あるものとしていることを「ぶどうの房」に例えて説明している。ここではその結合が様々なかたちの「志」によって維持されていることに注目したい。それはこれまでみてきたように、生まれて、育って、死んでいく場を満足できるものにする、腰を据えて暮らすための居場所をつくる、先人の足跡を学び引き継ぐ中で生きる誇りを見出すなど、地域に暮らす人びと自身が自分たちのために掲げた志であった。つぐら舎が「志民役場」と称しているのは、こうした志が集まり、創意工夫による創造活動の中心になる場という表明であり、そのような場が今まさに求められていることを示唆している。

2つ目はこのような活動が続けられてきた素地として、この地域特有の無尽講の組織が重要な役割を果たしてきたということである。「講」は様々な目的のために組織される「機能集団」である。これらの組織は目的を果たすと解散し、また別の目的が生まれると新たな講が生まれるといった、即興性(improvisation)がひとつの特徴であり、強みでもある³⁷⁾。つまり、何かをやってみようと思った時に有志を募り実際にやってみる、あるいは失敗しても解散してやり直してみようという行為は、広い意味で講の発想と類似しているとみることができる。勝沼を含む、山梨県全域は、とりわけ無尽講が盛んな地域であり、今でも人びとの暮らしの中に講が息づいている。聞き取り調査で明らかになったように、甚六会は無尽講として始められた。甚六会を立ち上げた内田金光氏の「自分達の住み良い地域を造るには行政ばかりでは出来ません。自分達の持っている能力をみんなで出し合い、何かを始めなければことは起きませ

ん。組織を利用して何かを起こすそれが起爆剤となって大きなものになるかもしれません。失敗するかもしれません。しかし失敗しても何かが始まるかも知れません。自分達で考え行動するそれが地域造りの始まりだと思います³⁸⁾」という言葉は、講組織の発想をよく表している。

かつぬま朝市もその始まりは講組織といってもよい形態であった。そして、歴史を遡れば、明治の合併時、今から約150年前に日本で初めて葡萄酒醸造業を始めた「祝村葡萄酒会社」もまた、数人の有志が集まって設立された講的組織であったことを、ここではあらためて想起しなければならない³⁹⁾。つまり、この地域では、講的組織それ自体、あるいはその発想が1つの素地となって、様々な活動が脈々と展開し続けてきたとみることができるのである。これもまた、この地域の地域づくりをひとつの系譜として理解する根拠となろう。

個々の地域づくりの実践を歴史的に理解したことで明らかになった以上の諸点は、広域行政時代の地域とその役割を考えようとする今日において、重要な示唆を与えうるものと思われる。ただし、本稿では山梨県甲州市域を中心とした事例分析にとどまるため、他地域との比較や政策との対比も必要となろう。以上は今後の課題としたい。

(筑波大学・生命環境系)

【付記】

本稿の骨子は2015年6月に山形県立米沢女子短期大学で開催された歴史地理学会大会シンポジウム「地域資源の歴史地理」で報告したものである。現地調査では、地域の皆さまから多大なご協力をいただきました。なお、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金[若手研究(B)]「近代日本における地域の経済発展の論理と構造に関する歴史地理学的研究」(課題番号25770293, 研究代表者:湯澤規子)の研究成果の一部である。

〔注〕

- 1) 本稿では原則として「ぶどう」と「ワイン」という用語を用いるが、歴史的な用語としてあえて「葡萄」、「葡萄酒」を用いる部分もある。
- 2) 内海優子『少子高齢化住宅団地における地域資源を活かした生活共同の可能性—ひたちなか市「NPO法人くらし協同館なかよし」を事例に一』2014（筑波大学修士論文）の「生活拠点の創出」に関する議論より示唆を得た。
- 3) 宮口侗廸『地域づくり 創造への歩み』古今書院、2000は、その代表的成果である。また、2014年10月には山梨県小菅村を会場とした経済地理学会多摩川源流地域大会では「農山村の新たな地域づくりの展開」と題したシンポジウムが開催された。その内容は経済地理学年報61-2、2015にフォーラムとして掲載されている。
- 4) 前掲3) ii頁。
- 5) 高橋英博『共同の戦後史とゆくえ—地域生活圏自治への道しるべ—』御茶の水書房、2010。
- 6) 勝沼町誌刊行委員会編『勝沼町誌』勝沼町役場、1962、106頁。
- 7) 第百回菱山地区敬老会実行員会編『菱山百年』第百回菱山地区敬老会実行員会、2004、31頁。以下の記述は同資料による。
- 8) 前掲6) 1014頁。
- 9) 前掲6) 1015頁。
- 10) 前掲7) 21頁。
- 11) 前掲6) 577頁。
- 12) 4Hクラブは農村青少年クラブとも呼ばれ、農業改良、生活改善事業と合わせて始められた。4Hクラブは1910年頃にアメリカで始まり、第2次世界大戦後に世界各国へ普及した。古謝瑞幸「4Hクラブの組織と活動」琉球農家便り187、1971、2-10頁。
- 13) 前掲6) 577-578頁。
- 14) 内田金光氏への聞き取り調査（2013年8月29日）。なお、この地域では長男を「総領の甚六」と自嘲的に表現する言葉がある。16人の長男たちは16と甚六にちなんで「甚六会」と名付けたため、本稿でもこの言葉を用いた。
- 15) 『甚六桜関係資料綴り』（篠原氏所蔵）より抜粋。下線は筆者付記。
- 16) 甚六会20周年記念事業実行委員会編『今、花開く地域づくりの夢』甚六会20周年記念誌編さん委員会、1992、8頁。
- 17) 前掲16) 15頁。
- 18) 第二次世界大戦後の青年たちによる活動の記録には、茨城県玉川村を事例とした池上昭『青年が村を変える—玉川村の自己形成史—』農山漁村文化協会、1987（初版1986）などがある。
- 19) 菱山柔道スポーツ少年団設立25周年記念事業実行委員会編『菱山柔道スポーツ少年団設立25周年記念誌』菱山柔道スポーツ少年団設立25周年記念事業実行委員会、2001、26頁。
- 20) 篠原敏彦氏への聞き取り調査（2013年6月29日）。
- 21) 前掲19) 6頁。
- 22) 前掲16) 13頁。
- 23) 甚六会30周年記念事業実行委員会編『甚六会30周年記念誌』甚六会30周年記念事業実行委員会、2003、2頁。
- 24) 内田秀俊『菱山元気プロジェクト 菱山暮らしわくわく大作戦 勝手な企画書』内田プランニング、（未刊行、発行年不明）。
- 25) 甲州市立勝沼図書館にすべて所蔵されている。
- 26) 小澤正光氏への聞き取り調査（2015年8月27日）。
- 27) 高安一氏への聞き取り調査（2015年2月20日）。
- 28) つぐら舎は同研究所の事務所機能を併せ持つ「地域の心の拠り所と交流拠点」としての役割も果たしている。
- 29) 高野忍氏への聞き取り調査（2015年8月28日）。
- 30) 勝沼文化研究所編「勝沼文化研究所だより」1-1、2012。
- 31) 石原家文書（藤井）A5-40「合村之記録」明治8年。下線は筆者が付記。
- 32) 佐々木雅幸『創造都市への挑戦 産業と文化の息づく街へ』岩波書店、2012（初版

- 2001)。
- 33) 井上ひさし『ボローニャ紀行』2010, 文芸春秋(初版 2008)。
 - 34) これは, ジョン・ラスキンの「固有価値論」に基づく議論である。ラスキン著, 飯塚一郎・木村正身訳『この最後のものにも ごまとゆり』中央公論新社(中央クラシックス), 2008(中央ボックス〈世界の名著〉52『ラスキン モリス』所収のものを編集, 同書は1862に刊行)。
 - 35) 杉山武志「『創造農村』に関する概念的検討に向けて—地理学的視点からの提起—」人文地理67-1, 2015, 20-40頁。
 - 36) 杉山がここでいうモラルとは, コミュニティ内の個人, 家族, 団体, 地域住民, 政府, 国際的組織などの主体間のネットワークが基づく「規範」を意味している。
 - 37) 佐々木は, 産業におけるイノベーションとインプロビゼーション(即興演奏のような改良)の重要性を紹介している。前掲32) 43頁。
 - 38) 前掲23) 2頁。
 - 39) 祝村葡萄酒会社の設立経緯については, 湯澤規子「山梨県八代郡祝村における葡萄酒会社の設立と展開—明治前期の産業と担い手に関する—考察—」歴史地理学55-3, 2013, 1-22頁に詳しい。

The Genealogy of Creativity of Local Associations: The Case of the Cherry Blossom of Jinroku and the Katsunuma Morning Market of Koshu City in Yamanashi Prefecture

YUZAWA Noriko

Koshu City in Yamanashi Prefecture has tourism resources such as the Jinroku cherry blossom and the Katsunuma morning market. However, rather than for tourism, these were initially developed for the local residents. In other words, these were the foundation for the life of the residents themselves. In this paper, we show that these are important elements of the “local resources” and define the act of making a foundation for living as “creativity of local associations”. The purpose of this paper is to reveal this history. The case study area is Koshu City in Yamanashi Prefecture. The results are summarized in the following two points.

The first point is that there is an historical connection between the cherry blossom of Jinroku and the Katsunuma Morning Market. Youth associations of the Meiji and Taisho period were reorganized into a “Jinroku associations” after the Second World War. They were leaders of the region. Initially, they began to clean the front of the Katsunuma station. Its core activity was a planting of cherry trees. They created a partnership in local region by tree planting. This activity continued for 30 years but was subsequently dismantled. However then, members of the Jinroku association began a wider activity. This activity evolved into the Katsunuma Morning Market, which also became the foundation for people’s lives in the region. The connection of these two activities can be explained as the genealogy of creativity of local associations.

The second point is that the regional conditions for these residents’ activities was creative. In Yamanashi Prefecture, the functional associations called “Kou” were historically abundant. When people share the same purpose, they improvise some associations. In this way, each time the community was altered, various associations were born in order to reconsider the foundation for local life. The various activities of these small associations played an important role in creating a foundation for life in the local area.

Key words: Creativity of Local Associations, Genealogy, Yamanashi Prefecture, Katsunuma, Foundation of Livelihood